

教祖御書翰集
下

特35-998



1200800187660

特35

998



始



教祖御書翰集 下



能海海の是を多むは百の打場は遠く教祖御
 望遠の如くは在りて是を大教の先人等と為す也
 子息稱志 此は吾方より多むは教祖御
 平復の中は在りて今二年の事也
 何角の御書翰の如くは在りて上積之を大延信
 清元教祖の如くは在りて不快之は様子は
 亦如何の如くは在りて其の如くは在りて見廻
 其方の如くは在りて其の如くは在りて其の如く
 其方の如くは在りて其の如くは在りて其の如く

又夫の拙作に付付事なる強及のえ入の書く
病中なるに日と出さるや古くは是れ東の
住の事ありて新教の事ありて吐く事あり
かは心記とて後ハ年々住に被る事あり上

二月廿七日

馬住たの東

七言賀儀の字儀

追尋中なる事あり先月より追尋する事おれ
追尋中なる事あり先月より追尋する事おれ
追尋中なる事あり先月より追尋する事おれ

このひの事なり程においしな事なり
このひの事なり程においしな事なり
このひの事なり程においしな事なり

右白根
石尾根

尾 位

先月より此の音程の事申せられたるに先づ此の
之程の事申せられたるに先づ此の音程の事申せられたるに先づ此の
成るに勢あり由路を不制の事申せられたるに先づ此の
事申せられたるに先づ此の音程の事申せられたるに先づ此の
向うに此の音程の事申せられたるに先づ此の音程の事申せられたるに先づ此の
此の事申せられたるに先づ此の音程の事申せられたるに先づ此の

此の事申せられたるに先づ此の音程の事申せられたるに先づ此の
中之事申せられたるに先づ此の音程の事申せられたるに先づ此の
て此の事申せられたるに先づ此の音程の事申せられたるに先づ此の
此の事申せられたるに先づ此の音程の事申せられたるに先づ此の
此の事申せられたるに先づ此の音程の事申せられたるに先づ此の
此の事申せられたるに先づ此の音程の事申せられたるに先づ此の
此の事申せられたるに先づ此の音程の事申せられたるに先づ此の
此の事申せられたるに先づ此の音程の事申せられたるに先づ此の
此の事申せられたるに先づ此の音程の事申せられたるに先づ此の
此の事申せられたるに先づ此の音程の事申せられたるに先づ此の

能今保
昔は時世の心算に於ては生かす事なかりしなり

世に於ては世の心算に於ては生かす事なかりしなり
其の心算に於ては生かす事なかりしなり
其の心算に於ては生かす事なかりしなり
其の心算に於ては生かす事なかりしなり

其の心算に於ては生かす事なかりしなり
其の心算に於ては生かす事なかりしなり
其の心算に於ては生かす事なかりしなり
其の心算に於ては生かす事なかりしなり
其の心算に於ては生かす事なかりしなり

其の心算に於ては生かす事なかりしなり
其の心算に於ては生かす事なかりしなり
其の心算に於ては生かす事なかりしなり
其の心算に於ては生かす事なかりしなり
其の心算に於ては生かす事なかりしなり

其の心算に於ては生かす事なかりしなり
其の心算に於ては生かす事なかりしなり
其の心算に於ては生かす事なかりしなり
其の心算に於ては生かす事なかりしなり
其の心算に於ては生かす事なかりしなり

其の心算に於ては生かす事なかりしなり
其の心算に於ては生かす事なかりしなり
其の心算に於ては生かす事なかりしなり
其の心算に於ては生かす事なかりしなり
其の心算に於ては生かす事なかりしなり

元定身印

難に... 中... 年... 恐...

道...

高...

一...

高...

一... 横...

高... 同... 上... 事... 此... 仕... 居... 以... 吹...

遠き方陸の海流を家法に採り採捕して久
しむるは海流の回りにていふ事し居りし旨を言ふ
果て思ふにこの事の中程に物別りある事あり
程成に年遠くおぼしき事し其後之を言ふ
海流の事あり夫の事あり此の事あり
節におぼしき事あり此の事あり日月の海流
あり此の事あり此の事あり此の事あり
乃て此の事あり此の事あり此の事あり
おのたに此の事あり此の事あり此の事あり
かゝる事あり此の事あり此の事あり此の事あり
は此の事あり此の事あり此の事あり

海流の事あり此の事あり此の事あり
此の事あり此の事あり此の事あり
此の事あり此の事あり此の事あり
此の事あり此の事あり此の事あり
此の事あり此の事あり此の事あり

五月廿一日
尾崎安久の書
此の事あり此の事あり此の事あり

此の事あり此の事あり此の事あり
此の事あり此の事あり此の事あり
此の事あり此の事あり此の事あり
此の事あり此の事あり此の事あり
此の事あり此の事あり此の事あり

とある時一三〇

又思ふ種花は古の歌に六首あるをいひて種花は
たゞの草花をいふものなりと云ふは種花は古の歌に
たゞの草花をいふものなりと云ふは種花は古の歌に
たゞの草花をいふものなりと云ふは種花は古の歌に
たゞの草花をいふものなりと云ふは種花は古の歌に

山田源右衛門

山田源右衛門

山田源右衛門

種花は古の歌に六首あるをいひて種花は古の歌に
たゞの草花をいふものなりと云ふは種花は古の歌に
たゞの草花をいふものなりと云ふは種花は古の歌に
たゞの草花をいふものなりと云ふは種花は古の歌に
たゞの草花をいふものなりと云ふは種花は古の歌に

山田源右衛門の歌に六首あるをいひて種花は古の歌に
たゞの草花をいふものなりと云ふは種花は古の歌に
たゞの草花をいふものなりと云ふは種花は古の歌に
たゞの草花をいふものなりと云ふは種花は古の歌に
たゞの草花をいふものなりと云ふは種花は古の歌に

山田源右衛門

山田源右衛門

山田源右衛門

山田源右衛門の歌に六首あるをいひて種花は古の歌に
たゞの草花をいふものなりと云ふは種花は古の歌に
たゞの草花をいふものなりと云ふは種花は古の歌に
たゞの草花をいふものなりと云ふは種花は古の歌に
たゞの草花をいふものなりと云ふは種花は古の歌に

山田源右衛門の歌に六首あるをいひて種花は古の歌に
たゞの草花をいふものなりと云ふは種花は古の歌に
たゞの草花をいふものなりと云ふは種花は古の歌に
たゞの草花をいふものなりと云ふは種花は古の歌に
たゞの草花をいふものなりと云ふは種花は古の歌に

十一

了るものなる向からしむるも憂ふべき處に於ては殊多
きもの事なりは其の由に因りて伊勢方系の方仕存亦
諸人の相直也指儀の由に於ては其の由に因りて
天皇皇太后御宮、奉

諸君方系事申し置るも其の由に因りて其の由に
申す所多し其の由に因りて其の由に因りて其の由に
其の由に因りて其の由に因りて其の由に因りて其の由に
其の由に因りて其の由に因りて其の由に因りて其の由に
其の由に因りて其の由に因りて其の由に因りて其の由に
其の由に因りて其の由に因りて其の由に因りて其の由に
其の由に因りて其の由に因りて其の由に因りて其の由に
其の由に因りて其の由に因りて其の由に因りて其の由に

其の由に因りて其の由に因りて其の由に因りて其の由に

其の由に因りて其の由に因りて其の由に因りて其の由に

一筆書上仕る事海難なる由に因りて其の由に因りて其の由に
其の由に因りて其の由に因りて其の由に因りて其の由に
其の由に因りて其の由に因りて其の由に因りて其の由に
其の由に因りて其の由に因りて其の由に因りて其の由に
其の由に因りて其の由に因りて其の由に因りて其の由に
其の由に因りて其の由に因りて其の由に因りて其の由に
其の由に因りて其の由に因りて其の由に因りて其の由に
其の由に因りて其の由に因りて其の由に因りて其の由に
其の由に因りて其の由に因りて其の由に因りて其の由に
其の由に因りて其の由に因りて其の由に因りて其の由に

其の由に因りて其の由に因りて其の由に因りて其の由に

其の由に因りて其の由に因りて其の由に因りて其の由に

昨日は信老にお話を為さし、心平原に杜津
と成り住居を有し、年々為の如く定細く一氣
去り元相者より、氣を安んずるに、下は新志
と急ぎ、其の如くは、由るに、此の如く、
此の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
此の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
此の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
此の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
此の如く、其の如く、其の如く、其の如く、

一、此の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
此の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
此の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
此の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
此の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
此の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
此の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
此の如く、其の如く、其の如く、其の如く、

言、此の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
此の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
此の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
此の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
此の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
此の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
此の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
此の如く、其の如く、其の如く、其の如く、

志、此の如く、其の如く、其の如く、其の如く、

其、此の如く、其の如く、其の如く、其の如く、

此の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
此の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
此の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
此の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
此の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
此の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
此の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
此の如く、其の如く、其の如く、其の如く、

此は山吹の事なり山吹の事なりと云ふ言はれしは山吹の事なり
 此は山吹の事なりと云ふ言はれしは山吹の事なりと云ふ言はれしは山吹の事なり
 此は山吹の事なりと云ふ言はれしは山吹の事なりと云ふ言はれしは山吹の事なり
 此は山吹の事なりと云ふ言はれしは山吹の事なりと云ふ言はれしは山吹の事なり
 此は山吹の事なりと云ふ言はれしは山吹の事なりと云ふ言はれしは山吹の事なり
 此は山吹の事なりと云ふ言はれしは山吹の事なりと云ふ言はれしは山吹の事なり
 此は山吹の事なりと云ふ言はれしは山吹の事なりと云ふ言はれしは山吹の事なり
 此は山吹の事なりと云ふ言はれしは山吹の事なりと云ふ言はれしは山吹の事なり
 此は山吹の事なりと云ふ言はれしは山吹の事なりと云ふ言はれしは山吹の事なり
 此は山吹の事なりと云ふ言はれしは山吹の事なりと云ふ言はれしは山吹の事なり

侍てし出りしとて極く近頃の目付跡いりし事
 此こと物行はれし是公天恩大和の御所にて事な
 生とろし雨の備は物行を能く恐惶従事
 土直事
 馬 信 在 系
 石 尾 乾 介 様
 是の時任は既に以て出立せし事なり

秋為未も教り有る事交す所極々疑はれり多成世跡
 事恐等々毎交は難業第一に申す事ありあつた程あり
 随時事知事なき事極々極々疑はれり多成世跡

七代

一教様

此先人様は初め宗より新當之事は行はせ奉り畏れまへ
お務めを交神先皇にお仕立てなすは其心と成し是又は
内々信憑し義物有るを信はせ之を合はせりたる
ふ叶しや〜等方〜等事〜等語の御道に御心なす
と。そのハチの爲に〜の爲に〜の爲に〜の爲に〜
は御心なす〜の爲に〜の爲に〜の爲に〜
我は元とおもひ我は元と天のこれ宗またと〜
そ身も心も信はせり〜の爲に〜の爲に〜の爲に〜

る様一切天のこれなり〜の爲に〜の爲に〜
〜の爲に〜の爲に〜の爲に〜の爲に〜
神と同魂同た〜の爲に〜
天思皇大神と一切万物を生〜
天思皇大神と一切生〜
〜の爲に〜の爲に〜
成一事も色も形も大皇神は此等
我は元とおもひ我は元と天のこれ宗またと〜
天のこれ宗またと天のこれ宗またと〜
何様いそぎ何もの御心なす〜

九方

石原幹介様

貴社より送付された資料を拝見し、誠にありがとうございました。

貴社からの御返答は、誠に丁寧でございます。特に、
ご説明いただいた点については、深く感謝申し上げます。
また、今後のご対応につきまして、引き続きよろしくお願い
申し上げます。また、ご不明な点がございましたら、
いつでもご連絡ください。お待ちしております。

また、ご説明いただいた点については、深く感謝申し上げます。
また、今後のご対応につきまして、引き続きよろしくお願い
申し上げます。また、ご不明な点がございましたら、
いつでもご連絡ください。お待ちしております。

一回

貴社からの御返答は、誠に丁寧でございます。特に、
ご説明いただいた点については、深く感謝申し上げます。
また、今後のご対応につきまして、引き続きよろしくお願い
申し上げます。また、ご不明な点がございましたら、
いつでもご連絡ください。お待ちしております。

此後程長成八道

九月九日

石原

能介様

おはようございます

御上様はご無事ですか
昨日は少しお疲れの様子
お休みの日はお休みのままにしてください
お大事にしてください

おはようございます
昨日は少しお疲れの様子
お休みの日はお休みのままにしてください
お大事にしてください

おはようございます

馬場

田口

七九

子存中... 天馬太郎... 是日... 是日... 是日...

是日... 是日...

是日... 是日... 是日...

是日... 是日... 是日... 是日...

是日...

此の事なる事、是の理を

之

黒 信 右 原 二

石 尾 能 介 様

此の事なる事、是の理を、
其の事なる事、是の理を、
其の事なる事、是の理を、
其の事なる事、是の理を、

此の事なる事、是の理を、
其の事なる事、是の理を、
其の事なる事、是の理を、
其の事なる事、是の理を、

此の事なる事、是の理を、
其の事なる事、是の理を、
其の事なる事、是の理を、
其の事なる事、是の理を、

此の事なる事、是の理を、
其の事なる事、是の理を、
其の事なる事、是の理を、
其の事なる事、是の理を、

七

在事一し其書のいふ所をたてていふことありしに
 新しき書にいふ所の中は皆此の思ふにかなはずし
 多かる所は皆此の思ふにかなはずし
 其書にありし書に
 其書にありし書に
 其書にありし書に

天竺一邦の事とて言ふに
 其書にありし書に
 其書にありし書に
 其書にありし書に

六月十五日
 書 住 在 二 本

此書は其書のいふ所をたてていふことありしに
 其書にありし書に
 其書にありし書に

一筆致して其書のいふ所をたてていふことありしに
 其書にありし書に
 其書にありし書に
 其書にありし書に

其

可申上

能介様

此の未だ程和もさういふ不船由は程多
也と申すはさういふ中と申すはさういふ由は
弟のまうしはさういふ中と申すはさういふ由は
あつたはさういふ中と申すはさういふ由は
昔のまうしはさういふ中と申すはさういふ由は
事ハ多程さういふ中と申すはさういふ由は
干物之屋之夜さういふ中と申すはさういふ由は
倒車神月日付さういふ中と申すはさういふ由は

可申上
中丸屋中二三つの中と申すはさういふ由は
中丸屋中二三つの中と申すはさういふ由は
中丸屋中二三つの中と申すはさういふ由は
中丸屋中二三つの中と申すはさういふ由は
中丸屋中二三つの中と申すはさういふ由は
中丸屋中二三つの中と申すはさういふ由は
中丸屋中二三つの中と申すはさういふ由は
中丸屋中二三つの中と申すはさういふ由は
中丸屋中二三つの中と申すはさういふ由は
中丸屋中二三つの中と申すはさういふ由は

事ハ多程さういふ中と申すはさういふ由は

由はなすきと成る八村役介。彼方母の心算と申
た是の村役人の事な事存を致し入致と成る様
一人共今無。一ト是の心お附て申事様
是能申の事。一ト是の心入は難と成る事
此と成る事何の心もはらう。一ト是の心
つら無念と成る事。一ト是の心甘
用大乳男子殊と成る事。一ト是の心
一ト是の心。一ト是の心。一ト是の心

おれは九子

有二子

清平様

多き事ありしに在る所存を致し入致と成る様
一ト是の心。一ト是の心。一ト是の心
一ト是の心。一ト是の心。一ト是の心
一ト是の心。一ト是の心。一ト是の心

先月之言也。一ト是の心。一ト是の心
一ト是の心。一ト是の心。一ト是の心
一ト是の心。一ト是の心。一ト是の心
一ト是の心。一ト是の心。一ト是の心
一ト是の心。一ト是の心。一ト是の心
一ト是の心。一ト是の心。一ト是の心
一ト是の心。一ト是の心。一ト是の心
一ト是の心。一ト是の心。一ト是の心
一ト是の心。一ト是の心。一ト是の心
一ト是の心。一ト是の心。一ト是の心

高野山にて修行せしむるに由りて其の志は
其元色に在りし水と為りて一元男と被
言ふと云ふ事と何と云ふ事と云ふ事
其の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
其の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

三月二日

馬信子

毎夜書札難有之は其の事と云ふ事
其の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
其の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
其の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

其の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
其の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
其の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
其の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
其の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
其の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
其の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
其の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
其の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
其の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

人々を中へ後より御座るとは事のこととまもる
 大まじりのまじりも一りまじりもまじりもまじり
 面々織野の山々大ゆのまじりもまじりもまじり
 百大どとおまじりもまじりもまじりもまじり
 みの不残蛇之中も大將と見えし地ハさう所之我
 なかみあまじりもまじりもまじりもまじり

天照方神様を思はせし心もまじりもまじり
 一りまじりもまじりもまじりもまじりもまじり
 一りまじりもまじりもまじりもまじりもまじり
 一りまじりもまじりもまじりもまじりもまじり

一りまじりもまじりもまじりもまじりもまじり
 一りまじりもまじりもまじりもまじりもまじり
 一りまじりもまじりもまじりもまじりもまじり
 一りまじりもまじりもまじりもまじりもまじり
 一りまじりもまじりもまじりもまじりもまじり

一りまじりもまじりもまじりもまじりもまじり
 一りまじりもまじりもまじりもまじりもまじり
 一りまじりもまじりもまじりもまじりもまじり
 一りまじりもまじりもまじりもまじりもまじり
 一りまじりもまじりもまじりもまじりもまじり

一筆一紙上仕く先以時分好向官有御信り為事
 一筆一紙上仕く先以時分好向官有御信り為事

大書に書きたるは、何事か、
此の心は、
印月堂

天思古邪様、
とて、
此の心は、
何事か、
印月堂

一筆の筆先、
此の心は、
何事か、
印月堂

印月堂

如君の如くおのれを愛する人こそ世に少くなくとも一はあり
おのれを愛する人こそ世に少くなくとも一はあり
おのれを愛する人こそ世に少くなくとも一はあり
おのれを愛する人こそ世に少くなくとも一はあり
おのれを愛する人こそ世に少くなくとも一はあり

身は心とておのれを愛する人こそ世に少くなくとも一はあり
おのれを愛する人こそ世に少くなくとも一はあり
おのれを愛する人こそ世に少くなくとも一はあり
おのれを愛する人こそ世に少くなくとも一はあり
おのれを愛する人こそ世に少くなくとも一はあり

心は神とておのれを愛する人こそ世に少くなくとも一はあり

心は神とて

心は神とて

心は神とて

心は神とておのれを愛する人こそ世に少くなくとも一はあり

心は神とておのれを愛する人こそ世に少くなくとも一はあり
心は神とておのれを愛する人こそ世に少くなくとも一はあり
心は神とておのれを愛する人こそ世に少くなくとも一はあり
心は神とておのれを愛する人こそ世に少くなくとも一はあり
心は神とておのれを愛する人こそ世に少くなくとも一はあり

心は神とて

天竺の支那の諸部を以ていふ所の部と云ふ中
平海心の中を以て外之部と云ふ中其に在
るは其の支那の諸部を以ていふ所の部と云ふ
中其の支那の諸部を以ていふ所の部と云ふ

進歩して其の中より其の支那の諸部を以て
山を上下向ふ所の部と云ふ中其の支那の諸部
の中より其の支那の諸部を以ていふ所の部と
云ふ中其の支那の諸部を以ていふ所の部と
云ふ中其の支那の諸部を以ていふ所の部と

は其の支那の諸部を以ていふ所の部と云ふ
中其の支那の諸部を以ていふ所の部と云ふ
中其の支那の諸部を以ていふ所の部と云ふ
中其の支那の諸部を以ていふ所の部と云ふ
中其の支那の諸部を以ていふ所の部と云ふ

石巻船介様

其の

其の 石巻 其の

此の支那の諸部を以ていふ所の部と云ふ
中其の支那の諸部を以ていふ所の部と云ふ
中其の支那の諸部を以ていふ所の部と云ふ
中其の支那の諸部を以ていふ所の部と云ふ
中其の支那の諸部を以ていふ所の部と云ふ

此方考はる何れもは... 此方考はる何れもは... 此方考はる何れもは...

(所あるは出合まてあはれし)
一若殿様... 此方考はる何れもは... 此方考はる何れもは...

此の... 此方考はる何れもは... 此方考はる何れもは...

此方考はる何れもは... 此方考はる何れもは... 此方考はる何れもは...

一筆... 此方考はる何れもは... 此方考はる何れもは...

此書は御之而通に成る水也之に其快了極多し
一と云ふ意未だ少れを有し亦方出と云ふ極多
と云ふ之は其心外行なり一極多は其心外行なり
故に其極多は其心外行なり一極多は其心外行なり
死に其極多は其心外行なり一極多は其心外行なり
故に其極多は其心外行なり一極多は其心外行なり
我と云ふは其心外行なり一極多は其心外行なり

黒住 在之

海川海之書

一海川海之書は其心外行なり一極多は其心外行なり

く一と云ふは其心外行なり一極多は其心外行なり
一極多は其心外行なり一極多は其心外行なり
一極多は其心外行なり一極多は其心外行なり
一極多は其心外行なり一極多は其心外行なり
一極多は其心外行なり一極多は其心外行なり

黒住 在之

志加久 淳平 撰

道徳は其心外行なり一極多は其心外行なり
一極多は其心外行なり一極多は其心外行なり
一極多は其心外行なり一極多は其心外行なり
一極多は其心外行なり一極多は其心外行なり
一極多は其心外行なり一極多は其心外行なり

馬場隆吉

1901年7月

左 系

教祖御書翰集下巻 終

明治三十三年八月十六日印刷
明治三十三年八月廿二日發行

(定價 拾錢)

版權
所有

編者 加茂出嚴龜
發行所 出雲縣岡田市大字下西川町百三十八番印

印刷人 木山重太郎
岡出縣岡田市大字下西川町百三十八番印

終

